

有についてのスワレスの説を述べている所では、[このことは“*Modo*”(Ⅲ651—654)の項目についてもいえるのであるが] スワレス説と、スワレスをこの見解に導いた動機との真の理解を示していないように思われるのである。スワレスは偶有を単なる *ens quo* と考えなかったが、内的 (*intrinsecus*) 形相と考えた。そして又実体を偶有の単なる基体 (*substratum*) に還元することも決してなかった。スワレスの見解の理由は *Ferro* が考えている所のものではなく、偶有の分離可能性の問題である。それは他の考え方では十分に解決せられ得ないと考えられていたのである。我々も又、もし分離可能性が救われるべきならば、スワレスの見解は受け入れらるべきであるとする。しかしもし *Echarri* (*Philosophia entis sensibilis*. Barcelona 1959. pp. 253 ss.) が根柢なしにではなく考えているように、分離可能性が必要とされないならば、その時にはトミズムの見解が選ばれるべきであると思われる。しかしこの辞典に於ては分離可能性は救われるべきであると考えている。

しかしこれらの些少の瑕瑾はこの辞典が中世哲学のあらゆる研究者に与える有用性に比すれば全く問題にならないとってよいであろう。(小山宙丸訳)

Institut International de Philosophie. PHILOSOPHY IN THE  
MID-CENTURY.

A SURVEY. Edited by R. Klibansky. Firenze (La Nuova Italia)  
1958—59. 4 vols. : I Logic and Philosophy of Sciences XI—336 pp. ;  
II Metaphysics and Analysis 218 pp. ; III Values, History and Religion  
232 pp. ; IV History of Philosophy. Contemporary Thought in Eastern  
Europe and Asia 330 pp.

Francisco Pérez Ruiz, S. J.

文献的報告といったものは、それができるだけ完全なものであることが大切であるが、またそれがいかに困難なことであるかも周知の通りである。Institut International de Philosophie は上記の4巻において、ある時期すなわち1949年から1955年にかけて出版された哲学的研究の系統的な概観をわれわれに提示してい

る。そこでは単なる表題の目録ばかりでなく、個々の問題について専門的に手がけられた註解の文献報告までもが収められている。註解される当の著作は各国語で書かれたものであるが、それについての紹介と註解は例外なく英語または仏語で書かれている。この種の出版は国際哲学会を機会に今後も五年毎に続けられるであろう。

本書評では、中世哲学研究にとって関係があると思われる問題についてだけ述べることにする。「中世哲学」という表題がついている4巻40頁—78頁では *Montreal* 大学の *Institut d' Etudes Médiévales* で作成された、卓越した報告と註解が目につく。そこには308もの研究が収められ、註解されている。このような数多い研究は他のどの節にも見られない。「一般価値論」(Ⅲ, 3—41) では 259 の研究が「言語分析論」(Ⅱ, 146—202) では 232 の研究が掲げられているが、その他の諸節では研究の数は遙かに少ない。もっとも研究の数が多いということが中世哲学の価値を証拠立てる決定的な要素であると言うのではないが、しかし中世哲学研究を今日あらしめた熱情といったものを示している。

紹介されている著作の内容はあらゆる部門に跨っており、ここでその全部に言及することは不可能であるから、本書評では、若干の問題についてだけ述べることにする。いくつかの研究は中世哲学といったものがあつたかの問題とその在り方を扱っている (p. 40)。また多くの研究が教父と教父を育くんだ文化の核心との関係を取扱っている (p. 41)。そしてその多くが教父達の斬新さと、キリスト教をヘレニズムに還元することの不可能性を強調する (pp. 42—43)。また中世のプラトニズムについては、その重要性、複雑さ、持続性といったものが、確証されたものと見做されている (p. 47)。現在おこなわれている多くの研究には、12世紀の「ルネサンス」期を、それに先行する時期から切り離して、特に研究しようという或る傾向が見うけられる (p. 49)。聖トマスに関する研究は頗る多く、全部が同じ価値を持つわけもないが、トマスを歴史的によりよく認識し、哲学的により深く理解しようと努めている (pp. 56—57)。

P. Anawati O. P. は、「中世におけるイスラム哲学」(Ⅳ, 79—87) という節で、中世におけるイスラム哲学研究について述べている。彼は第一に、古典的著作の出版に看取される著しい活動性について、第二に、近代語で出版された翻訳について、第三に、権威ある人々とその教説について語る。この最後の研究は三つの部門にわかれる。1) ギリシャ哲学のアラビア人への伝承と、アラビア哲学の中世ラテン哲学者への伝承に関する研究。2) イスラム教徒におけるプラトニズムの

歴史に関する研究。3)特異な二、三の哲学者とその影響に関する研究。

さらに、Nicolaus Cusanus に関する特別な節がある。(IV, 88—94)あるものは Cusanus を最初の「近代的」哲学者のように考え、またあるものは彼を典型的な中世人と見做している。「イタリアおよびスペインにおける16, 17世紀の哲学」(IV,106—119)という節では、Francisco de Vitoria の特殊研究と新しい版, Suárez—形而上学, 論理学, 倫理学, 自然法, 国際法, 国家学理想—に関する, あらゆる部門に渉る数多くの研究が注目される。

このほか、多くの節において、中世を研究する人々にとって非常に有益と思われる多くの研究が散見される。たとえば Feys (I, 6—7) や Bochenski(IV, 5—6) が中世の論理学について書いている研究などもそうである。そういったものを全部この書評で取り上げることはできないが、少くとも或る重要なこと、すなわち現代の形而上学を論ずる際に、トマス主義的(広義の)形而上学が最高の重要性を持っているということを見落すことはできない。この現代にまで生き続けるトマスの形而上学の生命力は、同じ意味ではないが本書の多くの箇所(I, 317; II, 27—29; 44—45; III, 103参照)に現われている。そしてこのことは、中世研究というものが、単に歴史的重要性ばかりでなく、たしかに哲学的な重要性をも持つものであることを明示している。(有働勤吉訳)